

ティーチング・ポートフォリオ(教育業績ファイル)

教員氏名	石田 麻子
主な担当科目	音楽芸術運営特別演習②,芸術運営論Ⅱ,世界の文化政策研究,文化政策論Ⅱ,博士後期課程学位審査会,博士後期課程予備審査
2025年の教育目標・授業に臨む姿勢	授業評価アンケートで「文化政策論という講義名だけ見ると固い印象を感じますが、この大学の全ての人に受けて頂きたい素晴らしい内容でした。普段あまり関係の無い分野についての知識も深められ、多くの新たな発見がありました」といった声に応えたいと考え、時事問題なども多く扱ってきた。巻き込み型の授業のほうが、手ごたえがあると感じるようになり、授業方法の改善に努めていきたいと課題提起したとおり、講義とミニ・ワークショップのような対話型授業進行を極力おこなうようにした。
2025年の教育に関する自己評価	ゼミで指導した学生たちの発表の場を学会で確保したり、優秀論文賞受賞者もゼミ生から輩出したりした。巻き込み型の授業展開に努め、学生たちとの対話を重視した。学生からのミニレポートも授業で課しており、必ず目をとおり、授業進行に役立てた。外部講師を招いての授業では、変化する学生たちのニーズに応えられるような講師陣を招聘するように心がけた。増える一方の留学生たちのポテンシャルを活かせるように、大学院での授業も国際的な視点を取り入れるように努め、好反応を得た。
2025年のFD活動に関する自己評価	教育課程委員長として、大学FDおよび大学院FDでの講師を務めた。大学のカリキュラム改革の全体像の理解をはかり、教員の新たなカリキュラム運用への意識醸成に努めた。教員の意識改革こそ、学生教育の質向上に資するものと考え、引き続き理解いただけるように力を尽くす所存である。また、FDの機会ならずとも、教育課程委員会や関連する事務局運営との連携など、良好な部会・分科会とのコミュニケーション向上に努めてきた。
授業改善のために取り入れた研修内容	増え続ける留学生への対応について、アートマネジメント分科会での教員間の情報共有、さらに大学、大学院FD後に得られた教員からの声などをあわせて、留学生や日本人学生たちのニーズの所在を確認している。こうした教員からのダイレクトな事例紹介やニーズの吸い上げこそ、FD開催の意義の一つであると考えている。さらに、大学を取り巻く多くの社会課題の共有も今や必須のものとなっているため、外部講師の講義(弁護士の方のご講義など)も授業改善に役立つと考える。

2025 年度(秋学期)「学生による授業アンケート」結果に対する授業改善計画書

教員コード:1404 教員名:石田 麻子

1)アンケート結果に対する所見

「文化政策論Ⅱ」(3 年生必修、他コースにも開講)において、総合評価が 3.95 と極めて高い結果となった。「興味を持って出席している」「工夫がなされている」についても、3.85 と高い評価を得ることができた。一方で、復習時間については、44 分程度と多少低い時間にとどまった。レッスン準備などに比べれば優先順位が低くなってしまうことが考えられるなか、毎回課題を課してきたこともあり、比較的取り組んでいる状況ではないかと考えられる。

「芸術文化と社会Ⅱ」(2 年生必修、他コースにも開講)「芸術運営論Ⅱ」(3 年生必修)のアンケート結果において、高学年のほうが良い結果になっていることが読み取れる。これは、社会に出る準備をしなければならないという意識の高まりと比例しているためではないかと考えられ、こうしたニーズに応えるべく、講師、講義内容の検討、組み立てに活かしていきたいと考える。

2)要望への対応・改善方策

「文化政策論Ⅱ」については、「マジで楽しかった(原文ママ)、今後もこんな授業を受けてみたい」、留学生からも「留学生でもわかりやすく説明してくれた(中略)必ず課題があるのでその日の授業の復習ができる」など、着実に学びのステップを踏んでいることが見て取れ、学生に応じた、意図したとおりの学修成果をあげるような工夫が功を奏したと言える。授業はポピュラー系の学生が履修していることも踏まえて、必ず映像を交え、さらにクラシックにとどまらない映像を採り入れたことなどに手応えを感じている。こうした学生の状況に応じた教材活用が今後必要となると考える。

「芸術文化と社会Ⅱ」「芸術運営論Ⅱ」は各回に外部講師を招いて実施する授業。自由記述にあるとおり、14 回のうち 2 回、2 人の講師が急病になってしまい、とくに秋学期終盤だったこと、前日夜に判明したことなどで、急な対応とせざるを得ず、期待にそぐわなかった点があったことへの言及だろう。やむを得ない対応となったことを踏まえたうえでの指摘だったが、それだけ外部講師の方への期待が大きかったということだとも解釈できる。そのためお二人とも、次年度にお招きすることにして、ご快諾いただいている。また、アートマネジメントコース以外の学生から、沢山の学びを得た、役立ちそうな情報を得られたなどの感想が寄せられたことで、コース外に開放して開講している意義が確認できた。

3)今後の課題

担当したいずれの授業においても、学生の習熟度は様々で、さらに学修意欲も多様な状況である。そうした中で、成果をあげるためには、学生とのコミュニケーションに努め、「誰一人置いてきぼりにしない」ことを心がけていきたいと考えている。

以 上